

授業探訪

総合系科目・F 科目（言語 B）

多文化社会と異文化コミュニケーション（ドイツ語）

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 ミッ石 祐子

一全学共通科目総合系科目「F 科目」（言語 B）

立教大学の全学共通科目「F 科目」とは、外国語による総合系科目である。もともとは、交換留学生と一般学生がともに英語で日本およびアジアに関係する内容を学ぶ科目として 2001 年度に始まったものであるが、授業の内容も多様化し、また多くの学生が英語開講科目にチャレンジできるよう、「導入」、「中級」、「上級」とレベルを分けて展開し、開講数も大幅に増加している。これと並行して、英語以外の言語による F 科目も開講されることとなり、設置された科目が「多文化社会と異文化コミュニケーション」である。この科目は「上級」科目となっており、本授業の履修目安は CEFR B2 程度としている。想定している履修者は、これから当該言語圏への留学を考えている学生、留学から帰ってきた学生、また特別外国人学生（＝交換留学生）である。

一異文化コミュニケーション学部が提供する「多文化社会と異文化コミュニケーション」は、2024 年度から開講

2024 年度から開講された「多文化社会と異文化コミュニケーション」は、異文化コミュニケーション学部が全学共通科目に提供している科目である。複言語・複文化主義、「ちがいが」を前提とした多文化社会の中でのコミュニケーションを学ぶことをモットーとしている異文化コミュニケーション学部では、既に各言語 B による専門科目「レクチャー」が展開されている。同学部教授浜崎桂子氏によれば、その知見に基づいて新規開講された本科目は「**非英語圏における多文化社会と異文化コミュニケーションのあり方と意義について考える**」と定義されている。なお、2024 年度、2025 年度はドイツ語で提供されているが、今後、年度ごとに他の言語 B による科目が提供される予定である。

一2024 年度「多文化社会と異文化コミュニケーション」（ドイツ語）について

学期の前半は、ドイツ連邦共和国国営の放送事業体であるドイツ・ヴェレがドイツ

語学習のために無料で提供しているビデオ教材 Video-Thema から、多文化社会や異文化理解を考察するのに適したテーマを扱った。ドイチェ・ヴェレが提供している多くのビデオ教材は、ドイツとヨーロッパの現在の社会・文化問題を取り上げており、多文化社会における問題を比較的批判的に紹介しているものも多い。多岐のテーマについて話し合いながら、学生が社会における異文化間コミュニケーションの役割について自発的に考え、理解を深めることを目的とした。

ビデオは約 4 分～5 分のドキュメンタリーで、インタビューなどから構成されている。扱ったビデオのタイトルとテーマは以下のとおりである（和訳と＊は執筆者による）。

- ・甘いチョコレート、苦い後味
カカオ産地における貧困、児童労働問題、企業および消費者の役割
- ・移民背景があっても成功する？
ドイツに住む移民背景を持った市民たちの就職・職場環境、「名前」による差別
- ・お情けで置いてもらっている人たち（＊一部の移民）に新しいチャンス
市民権のない移民を取り巻く環境、ドイツ政府の新たな試み
- ・2 つの文化から成る Dirndl（＊バイエルンやオーストリアの女性の民族衣装）
ドイツ文化と自分のルーツの文化とのハイブリッド、新しいドイツ文化
- ・ウィーン：ばあばのところでケーキを食べてるみたいに
高齢者と若者、高齢者の働き方

以上のように、ドイツにおける多文化社会の課題、また日本で学ぶ学生にとって異文化であるドイツ文化について議論されるトピックについて、知見を深め、考察し、ドイツ語で議論することを目指した。

授業では、まず 1 回ビデオを通して観て、学生にトピックについての大まかなイメージを掴んでもらい、その後、細かくドイツ語の語彙や表現、場合によっては文法も確認しながら、内容理解を深めた。共通の情報源であるビデオの内容の誤解によるディスカッションでの行き違いを出来るだけ避け、かつディスカッションを円滑に進めるために必要な表現の幅を広げるためである。B2 程度のドイツ語レベルを想定しているとはいえ、扱う領域が多岐にわたるため、そのトピックに関連する専門的な概念など、初めて聞く単語や表現も少なくないようで、定着を図るため、ビデオに付いている聴き取り、語彙と表現の練習問題も活用した。それでもなかなか聞き取れず、苦戦することもあった。授業は基本ドイツ語で実施したが、この部分では適宜日本語も使用した。ビデオの詳細な内容や表現の確認をしつつ、その際学生には、内容的に気になったこと、自分にとって新しかったこと、違和感を覚えたことなど、とにかく気づいたことは何でもメモしてもらった。その後、メモしたことを全員に紹介し、聞いていた学生には、何かしらコメントすることを義務付けた。このコメントに更に誰かがコメントすることで、自然な成り行きとして議論が進むよう、試みたものである。今学期の履修者数は 7 名だっ

たが、実際の出席者数は5名だったので、終始、和やかなグループワークのような雰囲気だった。

学期の後半では、2024年度の当時点までに Video-Thema で公開されたビデオの中から、各自が興味のあるものを1本選び、それを授業で扱った。前半同様のやり方でビデオを扱った後、そのビデオを選んだ学生に、ビデオの内容を基にしたプレゼンテーションを行ってもらった。以下に学生が選んだビデオのタイトルを挙げる(和訳は執筆による)。また学生が作成したプレゼンテーション資料は図を参照されたい。

- ・気候変動はスキー環境をどのように変えるか (図1参照)
スキー観光のあり方、雪山スキーの代替

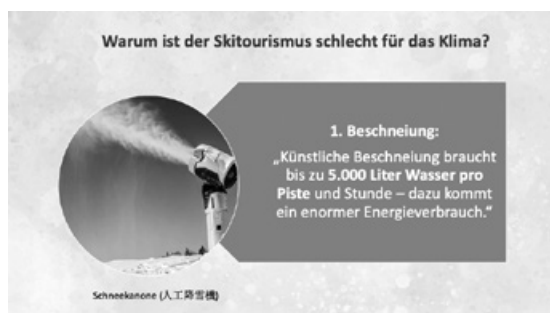


図1：「なぜスキー観光は気候問題にとって良くないのか」

- ・富裕層の税金は少なすぎ?
脱税対策、富裕税、累進課税
- ・ドイツワインの秘密 (図2参照)
ドイツでのワインの飲み方、ドイツのブドウ畑(ワインブドウ生産)の特徴



図2：「ドイツワインの特徴」

- ・LGBTQ 歓迎：特別な老人ホーム（図3 参照）

高齢の性的少数者の抱える問題、看護師・介護士の理解、共存



図3：「日本とドイツにおけるLGBTQ+の高齢者」

- ・コトブス工科大学：対極右コンセプト（図4 参照）

極右に対する留学生の脅威、コトブス工科大学の極右対策、学問の自由



図4：「第二次世界大戦後の人の移住」

プレゼンテーションして、それで終わりにならないよう、発表者にはクラスに対する質問を2〜3つ事前に用意させた。また、発表者の質問に順番に答えるだけでなく、ディスカッションらしくなるように、発表者自身にも質問の答えを予め考え、また想定される回答に対するコメントも出来るだけ用意させた。しかし、ディスカッションの司会を発表者に一任したことにより、上手く機能しないことも度々あった。例えば、発表者のクラスに対する質問が議論に発展しづらい性質だったため、質問に答えるだけで終わってしまう、科目担当者が介入して、やや強引に議論に持ち込んでしまったこともあった。この点は上手く工夫できず、もっとさりげなく助け舟を出してあげられなかったことが、少し悔やまれる。

上に見られるように、5名の履修者の関心は多様であるが、そのドイツ語歴も多様である。このクラスを構成している5名の背景を参考までに簡単に紹介する。

- ・ 文学部文学科独文専修 4 年。ドイツで生まれ 3 歳まで滞在。ドイツ語学習は大学に入学してから。1 年間エアランゲンに留学。
- ・ 異文化コミュニケーション学部 4 年。ドイツ語は大学に入学してから始める。9 か月間ライプツヒに留学。
- ・ 異文化コミュニケーション学部 4 年。韓国からの正規留学生。本格的なドイツ語学習は、立教大学に入学してからだが、日本に来る前に少し独学でドイツ語の勉強をしていた。
- ・ 経営学部経営学科 3 年。親がドイツ語圏スイス人と日本人で、高校まではスイスの学校に通い、その後立教大学に入学。
- ・ 特別外国人学生。親がイタリア人とドイツ人で基礎学校まではイタリア、オーストリアで高校と大学に通う。

このように文化的にも言語的にも多様な背景と関心を持つ学生たちが、「ドイツ語」という共通事項により、この時間と空間を共有したことは、そのこと自体がある種の「異文化コミュニケーション」であった。実際に学生たちがどれだけ、社会における異文化間コミュニケーションの役割についての理解を深めることが出来たかを計ることはできない。しかし学生たちの持つ背景が活かされていることは、議論が自然と多角的になったところに顕著にみられ、学生たち自身も互いに学び合い、視野が広げられていくのを実感できたのではないと思う。このような学びの瞬間に居合わせることが出来たのは、担当者冥利に尽きる、の一言だと思う。

みついし ゆうこ